

八重瀬町新里洞穴遺跡で採集された銅鏃

仲座 久宜¹⁾ 羽方 誠²⁾

Bronze arrowhead collected in the Shinzato Cave site, Yaese town, Okinawa.

Hisayoshi NAKAZA¹⁾ Makoto HAKATA²⁾

はじめに

今回紹介する資料は、当館が保管している銅鏃1点である。この銅鏃は沖縄県島尻郡八重瀬町にある新里洞穴遺跡で発見された。地表面で採集された資料ではあるが、貴重な資料を広く公開・活用するた

めにここで紹介することとした。

発見の経緯

2002年5月2日、当時の沖縄県立博物館に、一般の来館者から資料を見てほしい旨の連絡があり、館

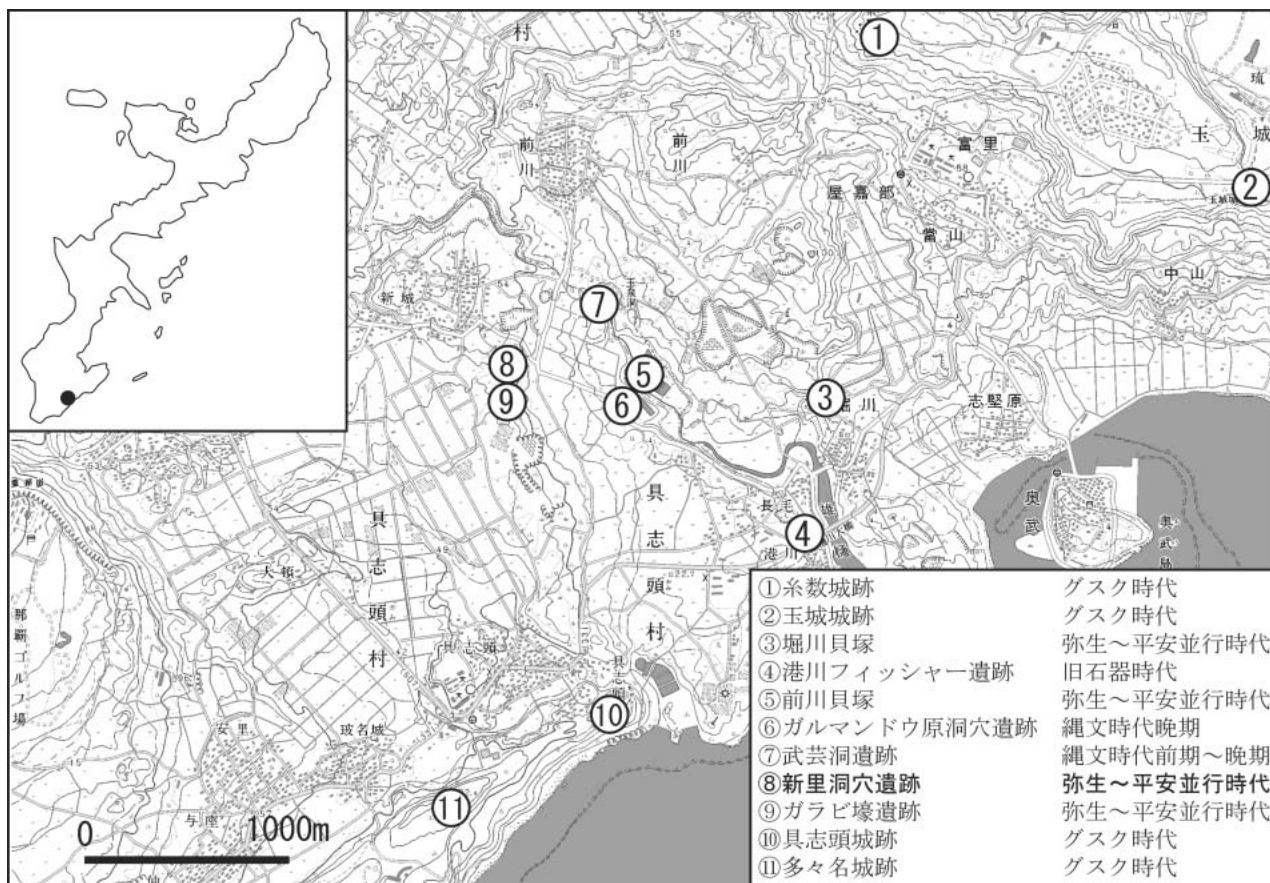


図1：新里洞穴遺跡の位置

¹⁾ 沖縄県立埋蔵文化財センター 〒900-0012 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
Okinawa Prefectural Archaeological Center, Uehara 193-7, Nishihara-cho, Nakagami-gun, Okinawa, 900-0012 Japan
²⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan.

長室にて資料の観察と発見状況の聞き取り調査を行った。

資料を持参したのはアメリカ海兵隊基地でツアーガイドをしているクリス・マジスキー氏で、クリス氏が発見者から譲り受けたものであった。彼が発見者から聞いた話をまとめると、「2年ほど前、数人で沖縄戦関係の資料収集の一環として八重瀬町（当時の具志頭村）の新里洞穴遺跡を訪れ、数ヶ所に分かれて第二次大戦時の遺物等の探査を行った。探査は金属探知器を用いることもあるが、洞穴内は琉球石灰岩の転石及び現代の金属製品が多いことから、ここでは探知機は使わずに人力で岩を除去しながら遺物を探した。その中で、メンバーのひとりが岩の間から本資料を採集した。しかし、当時は本資料がどのような性格を有するものかが判然としなかったため、発見者は採集した状態のまま保有していた」とのことであった。

発見場所の確認

2002年5月14日、発見場所の確認を行うため、ク

リス氏とともに現地を踏査した。

洞穴の入り口には八重瀬町教育委員会が設置した「新里洞穴遺跡」の標柱が立てられている。入口周辺はススキなどの草木が生い茂り、その中にゴムタイヤや家具、電化製品等が廃棄された状態になっている。けもの道状の小道から、すり鉢状になった急勾配の崖を降りると、合掌様に開いた横穴が確認できる。洞穴口下部は湧水が豊富で、常時洞内へと水が流れ込んでいる。

内部は外からは想像がつかないほど広く、高さもあるが、足もとには石灰岩塊が累々としており、暗いことも相まって移動に苦労した。

入り口から100mほど奥へ進むと、ようやく銅鏃を発見したとされる場所へたどり着く。周辺には大小の岩が散在するのみで堆積土はなく、その中に戦時中かそれ以降のものと思われるガラス片や陶磁器類、獣骨が散乱している状況であった。しかし、発見された銅鏃と同時期のものと思われる土器等の遺物は確認することができなかった。



写真1：新里洞穴遺跡の様子

遺跡の概要

新里洞穴遺跡は弥生～平安並行時代の遺跡で、多和田真淳氏によって石斧や土器等が採集されている(具志頭村 1986)。

本洞穴は「新里壕」とも呼ばれ、戦時中は日本軍の陣地壕及び新城集落住民の避難壕として使用していたとされる(沖縄県埋文 2001)。

資料の概要

本資料は青銅製の鏃及び、鏃と矢柄の接続部である鉄製の茎とで構成される。表面には所々に土や石灰分が付着している。鏃の先端部はわずかに欠け、一方向に曲がっているものの風化や錆は進行しておらず、保存状態は良好である。茎の部分は錆により膨張し、本来の形状は判然としませんが、末端部は破損しているようなので、現状よりも長かった可能性がある。

大きさは、全長が72mmで、そのうち鏃の長さが33mm、最大幅13mm、総重量は14.6gとなっている。鏃の横断面は正三角形で、角は鋭く尖る。各面には、最大幅6mm×長さ22mmで笹の葉形の浅い抉りがある。鏃の根元断面は六角形を呈し、その端部にソケット

ト状に鉄製の茎が差し込まれている。

なお本資料は、うるま市の宇堅貝塚(大城 1990)及び読谷村の浜屋原貝塚B地点(仲宗根・小原 2006)から1点ずつ出土している漢式銅鏃と、形態及び法量ともに類似している。宇堅貝塚の例は弥生時代並行期、浜屋原貝塚B地点の例は弥生～古墳時代並行期の資料である。本資料も同じ頃の漢式銅鏃と考えられる。

おわりに

今回紹介した漢式銅鏃は中国を起源とし、戦国後期の秦～前漢にかけて作られた弩と呼ばれる射撃用武器から発射される鏃である。先に紹介した沖縄県以外出土例としては、長崎県壱岐に所在する原ノ辻遺跡、福岡県福岡市クエゾノ遺跡、福岡県那珂川町安徳台遺跡群、兵庫県芦屋市会下山遺跡などにおいて、各1点～数点が確認されているのみである。

これらの資料を文献(小田2000、那珂川町2006)で確認した限りでは、抉りがない、あるいは抉りの形や断面形が沖縄の資料とは異なっている。しかし台湾の台北縣八里郷に所在する十三行遺址から出土した銅鏃(臧・劉2001)は、笹の葉形の抉りを持つ

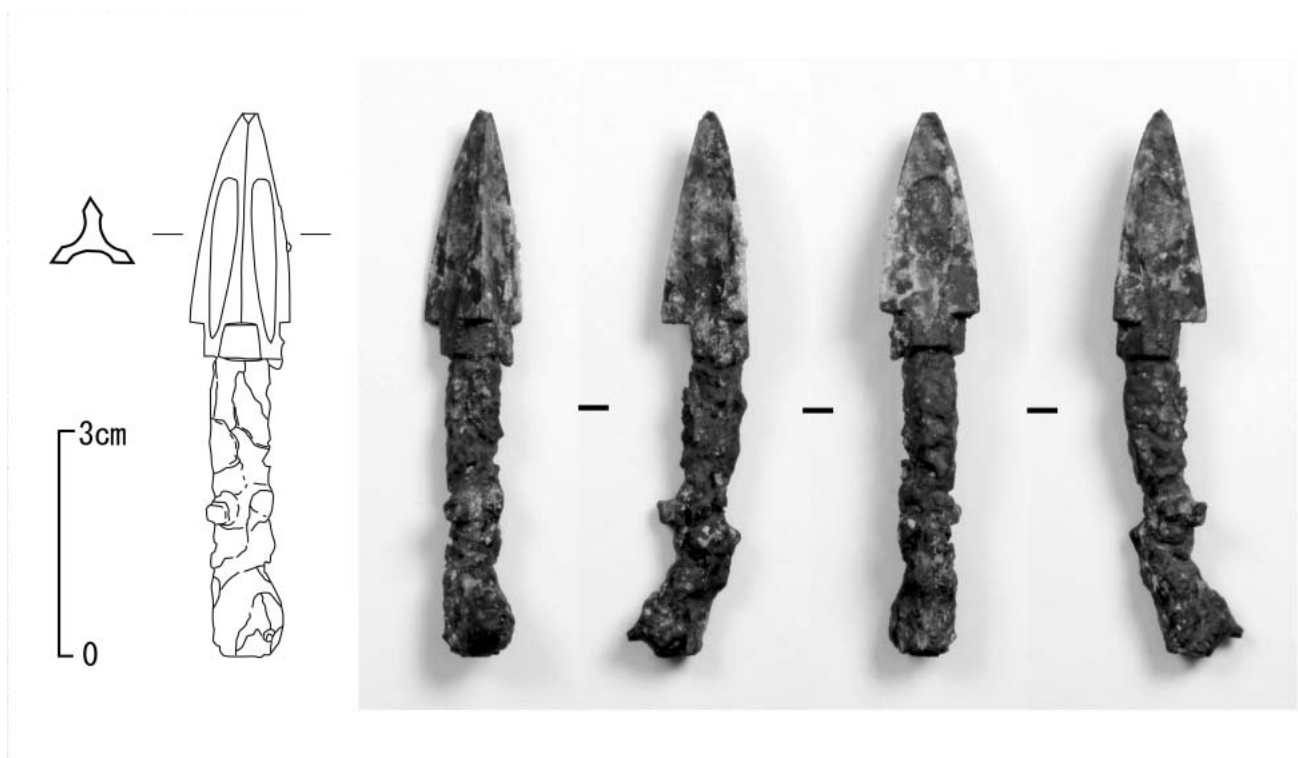


図2：新里洞穴遺跡で採集された銅鏃

ていて、断面形や全体の形・大きさも沖縄の資料とよく似ている。

この点から銅鏃の沖縄への移入ルートを想定すると、台湾を経由したことも考慮する必要があるが、出土事例が少ないことで判然としない状況である。この点については今後の資料増加を待つことにより解明されていくものと思われる。

謝 辞

クリス・マジスキー氏には資料を提供していただき、また現地調査へ同行していただきました。

比嘉珠美氏には図の編集を手伝っていただきました。記して感謝いたします。

参考文献

大城剛 「沖縄県具志川市宇堅貝塚群発掘調査概要」
『考古学ジャーナル』No.322 1990年

沖縄県立埋蔵文化財センター 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（I）- 南部編 - 』 2001年

小田富士雄 「沖縄の「弥生時代」と外来遺物」『高宮廣衛先生古希記念論集 琉球・東アジアの人と文化』（上巻） 2000年

具志頭村教育委員会 『具志頭村の遺跡』 1986年

島根県教育委員会 『姫原西遺跡』 1999年

那珂川町教育委員会 『安徳台遺跡群』 2006年

仲宗根求・小原裕也 「平成17年度浜屋原貝塚B地点発掘調査の概報」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第30号 2006

松下孝幸・中村愿・東門研治・新里尚美 「ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 研究紀要』第2号 2007

臧振華・劉益昌 『十三行遺跡：搶救與初步研究』台北縣政府文化局 2001年